飢餓対策ニュース　第284号　発行日2014年2月20日（毎月20日発行）定価15円

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry：略して JIFH）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体（NGO）です。1981年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、20ヶ国60の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

世界里親会
里子訪問ツアーのご案内

訪問地：カンボジア　アンロンベン地区
日　程：2014年5月12日(月)～17日(土)
参加費：13万円の予定

本年7月に自立支援の完了を迎える3つの村を訪問し、クロージング・セレモニーに参加、子どもたちや地区の皆さんと交流いたします。
資料のご請求・お問合せは大阪事務所
☎072(920) 2225　世界里親会まで。

ブレイクタイムセットでひと息

入進学・就職・転勤・引越しなど、慌ただしい日々を過ごしているあなたにホット一息できる“ブレイクタイム”セットのご案内です。3点セット合計 2,060円を送料無料の 2,000円でお届けします。

★スッキリおいしいレギュラーコーヒー
モカ・ブレンド200g　840円
★カカオの風味豊かな大人のココア
トラディショナル・ホットチョコレート（ココア）200g　600円
★爽やかな香りのリーフティー
アールグレーイティー　リーフ60g　620円
【申込締切 3月20日】
㈱キングダムビジネス
TEL：06-6755-4877　FAX：06-6755-4888
Web：キングダムビジネスで検索　ブレイクタイムセットから

東日本大震災　被災者支援募金を継続しています！

2011年3月11日の東日本大震災から3年をむかえました。被災された方々の生活再建は様々な形となって進んできています。その一方で現在も約27万人が全国各地で避難生活（復興庁最新統計）を続けておられます。
当機構はこれからも東北事務所を軸に被災地の中でも特に支援を必要とされる方々や地域社会の復興のために、できる限りの応援を継続してまいります。ぜひ今後とも募金にご協力ください。ウエブからも募金ができます。

いまからでも参加できます！
ハンガーゼロ・ファシリテーター・トレーニング

海外で活動をめざす方の特別な学習の機会です。
期　間：2014年3月17日(月)～21日(金)
会　場：東京基督教大学（TCU）　千葉県印西市内野3-301-5-1
費　用：30,000円（滞在費とテキスト代5,000円を含む）
定　員：12名　※申し込み・お問い合わせ：大阪事務所（吉本）

ハンガーゼロサポーターを大募集中!!
現在…3353口

今すぐ▶▶▶各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

□ フィリピン台風支援に協力します。
　緊急募金として ＿＿＿＿ 円協力します。
□ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
　毎月（　　）口　（1口1,000円）
□ チャイルド・サポーター（世界里親会）になりたいので説明書（申込書）を送ってください。
□ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
　毎月（　　）口　（1口1,000円）
□ JIFHサポーターとして協力します。
　毎月（　　）口　（1口500円）
□ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
□ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

氏名（フリガナ）：　　男・女
〒
住所（フリガナ）：
（電話）
▼申込日：　　年　月　日▼NL　号

FAX・072-920-2155

■発行者　岩橋竜介
■発行所　一般財団法人　日本国際飢餓対策機構
いいね大募集　Webサイトアドレス http://www.jifh.org/　eメールアドレス general@jifh.org　フェイスブック https://www.facebook.com/hungerzero
■募金方法　※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウエブサイトで
●郵便振替　00170-9-68590／日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替●クレジット、デジタルコンビニ
今すぐ募金ができます！　銀行からの自動振替　ゆうちょ銀行　その他金融機関　クレジットカード決済　VISA　コンビニ店頭で現金振込　ファミリーマート　FamilyMart　ローソン　LAWSON　サークルK

大　阪　〒581-0032 八尾市弓削町3-74-1　TEL(072)920-2225　FAX(072)920-2155
東　京　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCCビル517号室　TEL(03)3518-0781　FAX(03)3518-0782
東　北　〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-13-6エマオ2階E　TEL(022)217-4611　FAX(022)217-6651
愛　知　〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター2F　TEL(052)731-8111　FAX(052)731-8114
広　島　〒730-0036 広島市中区袋町4-8 CLCブックス2F　TEL(082)546-9036　FAX(082)546-9037
沖　縄　〒901-0156 那覇市田原3-8-1 ユリ香ハウス201号　TEL(098)859-4585　FAX(098)859-4540

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所（八尾市）、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さっています。

1分間に17人（内12人が子ども）
1日に2万5,000人
1年間では約1,000万人が
飢えのために生命を失っています。

一般財団法人 日本国際飢餓対策機構
2014 3 No.284

飢餓対策ニュース

わたしから始める、世界が変わる

フィリピン台風支援ボランティア派遣（4～5面に記事）

だれもが夢を語れる世界を

日本国際飢餓対策機構　財務部総主事　高橋献一

「夢をかなえるのに必要なのは、才能でも根性でもない。生き残る事や」。
朝の連続テレビ小説の中のせりふの一つです。第二次世界大戦に入り、多くの若者に召集令状が届くようになった頃、出征して行く若者に語られていたと記憶しています。70年ほど前までは、日本の若者にとっても、命のやり取りが眼前のものとして存在し、戦場には行かなかった者たちも、その多くが命をつなぐのに必死だった時代があったのです。当時の若者にもたくさんの夢や希望がありました。しかし、それを実現するためには、まず自らが生き延びることが最初の条件だったのです。今の日本に生まれ育った、特に戦争を知らない世代には、こうした事実があったことに対して実感が乏しいと言わざるをえません。
ひるがえって今の世界の現状を見てみると、飢餓や貧困のために命の瀬戸際に立たされている方は、およそ8億4千万人と見積もられています。1分間に約17人の方が飢餓や貧困が原因で命を落とし、そのうちの12人は5歳未満の子どもです。彼らは、夢を語る前に命を落としています。まさしく、生き残る事が夢への第一歩という過酷な現実が目の前に横たわっているのです。
さらに、貧しさゆえに学校に通うことの出来ない子どもは、世界に約1億2,300万人いると言われています。彼らもまた、生き延びることに懸命で、将来への夢を語ったり、その夢の実現への具体的な道筋を見る事が出来ない状況に置かれています。
ぜひ、ご自分の身に置き換えて考えてみてください。困っている時に、行き詰まった時に、見てみぬ振りをされたり無視されたりしたら、どんなに心が傷むことでしょう。差し迫った必要があるときに「頑張れ」と声だけをかけて何もしてくれなかったら、どうでしょうか。
どうか皆様の愛の手を伸ばしてください。たとえ一人一人の伸ばす手は小さくても、多くの人の手が加われば、救われる命が一人でも増えます。そしてその愛の輪が広がれば、さらに多くの方の命を救い、一人でも多くの子どもが夢を語り、希望をかなえるために学びを始める事ができます。皆様のご協力をお願いいたします。

「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。」（聖書）

ハンガーゼロ・アフリカ報告
コンゴ民主共和国

ハンズ・オブ・ラブ・コンゴ
代表 ジェローム・カセバ
（中央・西アフリカ担当）

ストリートチルドレンの施設を訪れるジェローム、キンシャサでこうした青少年を助けるプログラムを実施することを計画しています

活動の母体となる現地NGO（ハンズ・オブ・ラブ・コンゴ）が正式発足

昨年の7月31日、コンゴ政府よりNGO（非政府組織）の「ハンズ・オブ・ラブ・コンゴ」としての許可が下り、国内のどこででも自由に活動できることになりました。念願の事務所も小さいながらキンシャサで登録し、いよいよコンゴの支援と西アフリカの活動の調整を始めました。代表のジェローム・カセバからの報告です。

昨年ルムンバシで7月に行われた3日間のセミナーに参加した150人の内のひとり、国内避難民のパメラさん（'13年8月号掲載）は、セミナー参加後に別れ別れになった家族を捜すために、出身地の村に帰り、数ヵ月後に家族を連れて戻ってきました。パメラさんは、今度は家族と共に他の村、プエトに移り住むことを希望しました。彼はそこで土地を買って農作物を作り、他の避難民や村の人たちにVOC（共同体のビジョン）の原則を伝えて、仕事をすれば成功することができることを教えたいと言っています。

国内避難民のパメラさん㊧もVOCにチャレンジ

生活再建の第一歩

現在パメラさんと他の避難民は村の人々と協力して、とうもろこし、豆、さつまいもなどを作り、収穫を待っています。

またセミナーに参加した何人かの牧師たちが、教会で小さなプロジェクトを始めています。アイメ牧師は数羽の鶏を飼い、マサング牧師は家の庭にモリンガの木を植えて、教会員に何かを始めるように教えています。また国内避難民の方々はJIFHの支援による小規模融資を利用しての小さなプロジェクトをスタートしました。

事務所のあるキンシャサでは、ストリート・チルドレンや孤児・未亡人に住まいや食べ物、衣服などを支援しています。

ルムンバシでは国内避難民の方々が、困難の中にあっても笑顔を忘れずにいられるように、毎週日曜日に教会へ車で送り迎えをして助けています。今では避難民の中から聖歌隊が二つも生まれて、母国語で喜んで歌う姿も見られるようになりました。

ハンズ・オブ・ラブがサポートしている国内避難民

農作物を支援にも活用

ハンズ・オブ・ラブ・コンゴは将来、ルムンバシの孤児院での給食支援に、プエトでパメラさんたちが育てた農作物を利用したいと願っています。

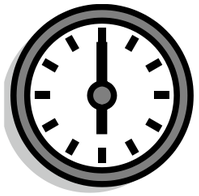
日本の皆さまのご支援を心から感謝します。私たちを初めとして多くの支援団体が安心してコンゴの人たちのために活動するには、何よりもこの国が完全に平和になることが必要です。平和のためにもお祈りください。

●アフリカの飢餓問題を解決するための「ハンガーゼロ・サポーター」を募集しています。毎月1,000円（1口）

ウガンダ・里子（マリサ）の一日

マリサ・ムシビカ・キスビさんは15歳でカイチ小学校の6年生。両親はエイズで亡くなり、ひいおばあさん、おじいさん、おばあさん、伯父さん、従姉妹のサラ（14歳、6年生）と暮らしています。おじいさんの畑で採れたものを食べて飢えをしのぎ、また売ることで何とか生活しています。畑仕事は家族みんなで行いますが畑は小さく、一家の収入は年に約96ドル（およそ1万円）です。

写真左からマリザ、伯父さん、おじいさん、おばあさん、手前に従姉妹のサラ

一日の流れ	マリザの日課	改善できればよいと思われること
 朝6時に起床～	6時に起きた後、水汲みに行き、庭の掃除とお皿を洗います。その後、部屋（土間）をほうきで掃き、おばあさんが作った朝ごはんのおかゆ（ポリッジ）を食べます。	水を汲みに行く井戸までは、片道1㎞あります。ただし、他の子どもに比べてまだ近い方です。 朝食は毎日ほぼ同じで、とうもろこしのお粥のみなので栄養は十分とはいえません。 家にトイレはなく、外の茂みで用を足します。不衛生でコレラ、赤痢に感染する心配があります。
～17時まで学校	家を7時30分位に出て、約20分歩いて登校します。 その後、夕方の17時まで学校で過ごします。	学校では1教室に生徒が95人、教師と生徒の割合は1：69人。勉強机も3人用のものを6人で使わなければなりません。また教科書は自分用のものは支給されないために、10人で1冊を使っています。 さらに家の畑仕事が忙しいときは学校を休まなければなりません。
～21時就寝まで	下校後は、水汲み、掃除、料理、皿洗い。 21時に就寝。	再び1㎞離れた井戸へ水汲みに行かなければなりません。 食事は、トウモロコシ、キャッサバなどの芋や穀物です。他の野菜や果物はあまり食べないので栄養の偏りが心配されます。

将来の夢　マリザもサラも…看護師になることを夢みて勉強中

一家はマリザと従姉妹のサラに教育を受けてほしいと願っていますが、収入が少なく昨年は食料のメイズ（とうもろこし）を売って、なんとか制服などの必要品をそろえました。現在二人は里親さんの支援を受けて学校に通い、家族も健康・衛生指導や農産物の収穫向上による収入改善の方法などを学んでいます。

食事の支度をしているマリザ㊧とサラ

このような子どもたちがこの地域で200人、里親さんを待っています。子どもたちと家族が貧困から抜け出して、コミュニティー全体が自立できるために皆様のご協力をお願いいたします。

●ウガンダとバングラデシュの子どもたちのチャイルド・サポーターを募集しています。申込みは大阪・世界里親会まで

フィリピン台風
緊急支援
ボランティア派遣
[レイテ島タクロバン]

日本からボランティアチーム（JIFH吉田知基ら6名）が1月17日～24日、1月31日～2月8日の2度にわたってレイテ島タクロバン市を訪れ、現地で支援活動を行っている「ナビゲーター・フィリピン」の炊き出しの手伝いや美容師さんによるヘアカット、ウタップ小学校（生徒数約500人）での特別授業を行いました。この学校は一部の教室が台風によって破壊されたため、午前と午後の入れ替え制で授業をしていました。生徒たちの多くの家が全半壊しましたが海岸沿いに比べて被害は少ない方で、かえって支援から取り残された状態でした。第1回目のチームに参加した小笹霞さんのレポートをお送りします。

ボランティアの小笹さんと子どもたち、学校での特別授業（写真下）をしたこともあって、楽しく交流することができました。

炊き出しでは日本から持参したカレールーで味付け、とても好評でした。

秋元大使「パンの缶詰」配布

「先の東日本大震災でいち早く支援していただいたので、今度は私たちがフィリピンを助けようと思いました。この支援は、パン・アキモトとJIFHとパン（救缶鳥）を買ってくれたお客さんのタッグで実現できました。フィリピンではパンを届けるだけではなく、日本のみなさんの優しい心を届けたい（パン缶に英語で手書きのメッセージが綴られています）と思いました。それを教室で受け取ったフィリピンの子どもたちが涙を流し、感謝の歌で喜びを表してくれて、私も涙がこぼれました。これからも人の優しさを届けていこうと思います」（秋元義彦ハンガーゼロ特別大使）

秋元さんのフィリピンでの配布の模様は、テレビ東京「カンブリア宮殿」（2月6日放送）でも紹介され大反響を呼び、いま「パンの缶詰」の生産が追いつかないほどに注目を集めています。当機構はこれからもパン・アキモトさんとの取り組みを通じて世界の人々の必要に応えていきます。

当機構は、2月下旬に再びフィリピンにスタッフを派遣し、パンの缶詰1万4千食分や岩手医科大学から寄贈された多数の食料品（缶詰）を配布いたしました。

困難の中での笑顔に励まされて

スーパー台風被害のレイテ島でのボランティア活動体験記

私たちが到着したレイテ島タクロバンの空港は電気がなく、真っ暗な中でのスーツケースの受け取りとなりました。屋根はトタン屋根を使用している箇所が目立ちました。スーツケースを運ぶ機械も機能しないので、係員の方々の手で行われていました。台風から2ヵ月以上が経っているのに、その爪痕は町全体に残ったままでした。

▲居住区に残された中型船舶。船体の「米と水が欲しい！」とのペイントが当時の緊迫した状況を連想させる

滞在場所への移動中、海沿いを車で走りながら見た光景は、折れて粉々になった木々と国連やNGOからの避難用テントの数々、そして全く片付いていない瓦礫の山でした。こんな所に人が住んでおられるのだと思うと、心が痛みました。フィリピン政府によると、今回の台風被害の死者は6,201人、行方不明者1,785人（1月29日現在）と発表されていました。しかし、政府は身元確認などを行っているわけではなく、実際に亡くなった方々の数は、さらに多いとも言われています。身元確認をすることなく埋められている遺体もたくさんあるそうです。

子ども達はとても元気に遊んでいましたが、実際、食べ物は非常に少ないので、皆が栄養失調だということを聞いたとき、本当にショックを受けました。子ども達は、表には出さないですが心の中には辛い思いを各自抱えています。少しでも子ども達の心に寄り添える支援が必要だと再確認しました。

子どもの描いた絵に言葉を失う

ウタップ村の小学校では、日本で準備をしてきた人形劇、紙芝居、歌にダンスなど子ども達を楽しませるイベントを行いました。その中で、「日本にも津波が来て大変な時期があったよ。この時の日本と今のフィリピンは、同じ状況だよ。この津波が来たとき、フィリピンの人たちも日本を助けてくれたんだよ」という話をし、日本の14歳の女の子が書いた作文の一部をフィリピンの子ども達の前で紹介しました。すると、笑顔でいた子ども達の中に、涙を流す子が何人かいました。津波が来て、瓦礫だらけになった東北の写真を見て、「今のタクロバンと一緒だ」という子ども達もいました。

その後子ども達に今回の台風の中で見たものを絵にしてもらいました。（※心のケアプログラムとして、現地スタッフ、学校教師と話し合って行いました）グループに別れてもらい、クレヨンを1ケースずつ配りました。するとどのグループも青色の取り合いになりました。そして、青を取った子は、みな溢れる水を連想させる絵を描きました。私の中で猛烈に印象に残っている絵があります。それは、子どもの遺体を抱いた大人の絵です。（その絵には、子どもの遺体だけでなく、他の大人の遺体も描かれていました）。その男の子は絵の中の遺体を指さして、「パタイパタイ」と言っていました。パタイとはワライ語で、死体を意味しています。大人の私でも、絵を見るだけでも非常に恐ろしい光景なのに、こんな小さい子ども達がどれだけ恐ろしい思いをしたのか…私は絵を見ていて、涙をこらえるのに必死でした。

“ありがとう”から生まれる力

また私はタクロバンの人たちに本当に大切なことを教えていただきました。それは「感謝」の気持ちを相手に伝えるということです。ある時ボランティアチームの誰かが「ありがとう」という言葉を、子ども達に教えました。すると、その日からだんだん「ありがとう」という言葉が村のあちらこちらから聞こえてくるようになりました。やがて大人へも広がり「ありがとう！ありがとう！ここに来てくれてありがとう。私たちを助けてくれてありがとう。私たちの為にあなたの時間を使ってくれてありがとう。炊き出しを持ってきてくれてありがとう、美味しいよ。一緒に遊んでくれてありがとう。私達に素敵な時間を与えてくれてありがとう。」と、たくさんの「ありがとう」を村全体から聞きました。目頭が熱くなりました。この言葉を聞き、皆の笑顔を見たとき、私は心底「来てよかった」と思いました。改めて、“人の為に尽くすということがどれだけ楽しくて、嬉しいのか”を再確認することが出来ました。そして、“ありがとう”という言葉は人を幸せにし、人と人とをつなぐ不思議なパワーがあるということを学びました。

壊れた家を応急修理してなんとか過ごしている家族

次は私たちがしてあげよう

タクロバンにある教会の牧師さんの話で、私の信条にしたいと思う言葉がありました。「Pay it forward」。Pay it Back(お返しをする)の反対語として、牧師さんは使っていました。これは、“自分たちがしてもらった嬉しかったことを、次は私たちがほかの人にしてあげよう”という意味です。そして、その愛の輪を作っていこうというメッセージです。タクロバンは、まだ被災して間もなく、厳しい生活を強いられている人がほとんどですが、前向きに物事を捉え、前進して行こう！という姿に非常に心打たれました。私たちは少しでも被災者の方々を励ますことが出来ればいいなぁと思いボランティア活動を行っていましたが、逆に私たちが励まされ、学ばされることが本当に多くありました。

しかしここには助けを必要としている方が沢山おられます。私がタクロバンで見てきた光景をもっと多くの人に伝えていきたいですし、国際協力団体でのボランティアも続けたいと考えています。これらを通して、日本から私に出来る支援を今後も行い、タクロバンとの関わりを続行したいと思っています。

（報告：ボランティア小笹霞（かすみ））

フィリピン台風緊急募金は、郵便振替またはクレジットカードで受付中。郵便振替　00170-9-68590　一般財団法人　日本国際飢餓対策機構　備考欄に「フィリピン台風」と記入。ウエブサイト http://www.jifh.org/ からもクレジットカードで募金ができます。

ルワンダの人々と紛争

ルワンダはもともと農業国で、人々は共通の言語と文化を持っていました。19世紀に王につかえる支配階級はツチ、それ以外の者はフツといって区別されるようになりましたが、裕福なフツの農民が政治力を持ってツチになったり、ツチがフツと結婚したりすることもあり、ツチとフツの境界線は絶対的なものではありませんでした。

しかし隣国のブルンジとともにベルギーの植民地となってから、ベルギーの利益のためにツチとフツが対立するように図られ、人々の国外強制退去や流血の悲劇が起こりました。独立後も民族紛争は繰り返され、中でも20年前の虐殺の悲劇は世界中の人々を恐怖に陥れる結果となりました。

現在、ルワンダでは身分証明書や書類で人々が差別されることはないということです。JIFHの協力団体「REACH」は、大虐殺に加わった人たちと被害を受けた人たちの和解を進める活動をしています。法律による和解だけではできない、一人ひとりの心の修復をめざしてさまざまなプログラムが行われています。

ルワンダでは紛争が収まり、国外に避難していた人たちが帰ってきて、新しい国づくりが始まっています。政府は貧困削減計画の一つとして、国民に靴を履くこと、学生は制服を着ること、トイレを造ること、ごみをためる穴を掘ること、牛は小屋で飼うことなどを義務づけました。さらに月に一度、全国一斉奉仕活動として清掃や道路整備、学校建設などが行われています。首都のキガリは開発が進み、高層ビルや新興住宅街が次々とできています。また周辺の町々でも水道や電気が少しずつ整備されてきました。このように、ある程度紛争が治まり平和が戻ることによって、人々の暮らしは少しずつ良くなってきています。

一方ルワンダには隣国コンゴの紛争によって、たくさんの人々が難民として逃れてきています。今もこの紛争に巻き込まれ、親とはぐれて親戚や知り合いに引き取られて暮らしている子どもたちが大勢います。キガリにあるピース国際学校では、このような子どもたちが勉強できるようにJIFHの里親さんと共に支援しています。

自分の国だけではなく周りの国の紛争も止まなければ、人々は本当に安心して暮らすことはできません。

JIFHが支援しているピース国際学校の子どもたち
（写真は昨年夏のワークキャンプより）

※当機構は、昨年よりルワンダ駐在として河合朝子を派遣しています。
ハンガーゼロ・アフリカのサポーターとなって応援をお願いいたします。